

映画Roman Holidayを用いた英語教育

著者	名倉 秀人
著者別名	Hideto Nakura
雑誌名	dialogos
号	8
ページ	161-175
発行年	2008-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00004985/



映画 *Roman Holiday* を用いた英語教育

名倉 秀人

1. はじめに

本稿では、大学生が1年次にどのように英語を学んでいくべきかについて、「映画を使う」という手法を取り上げている。本年度、筆者が受け持っているいくつかの授業で *Roman Holiday* を教材として使うことにした。この映画は昔から英語教材として使われ、今でも心を打ち、学ぶことの多い作品である。英米文学科では文学の名作をテキストとしてきたように、英語コミュニケーション学科においては、映画の名作を教材として使うことも選択肢に入れてよいのではないだろうか。なお、引用文の後ろに括弧内で示した数字は references を参照。

2. 劇中のニュース英語について

“*Paramount News*” brings you a special coverage of Princess Ann’s visit to London; the first stop on her much publicized goodwill tour of European capitals. She gets a royal welcome from the British, as thousands cheer the gracious young member of one of Europe’s oldest ruling families. After three days of continuous activity and a visit to Buckingham Palace, Ann flew to Amsterdam where Her Royal Highness dedicated the new International Aid Building and christened an ocean liner. Then went to Paris where she attended many official functions designed to cement trade relations between her country and the Western European nations. And so to Rome, the eternal city, where the Princess’ visit was marked by a spectacular military parade highlighted by the

band of the crack Bersaglieri Regiment. The smiling young Princess showed no sign of the strain of the week's continuous public appearances. And at her country's Embassy that evening, a formal reception and ball in her honor was given by her country's Ambassador to Italy. (8)

Paramount News は、1912 年に設立されたアメリカの映画会社 Paramount Pictures が作ったニュース映画である。当時は映画を上映する前にこのようなニュース映画を流していた。そのシーンを映画の冒頭に持ってきているということは、現実と映画のクロスオーバーを起こさせる狙いがあったと思われる。同時に映画のバックボーンを説明して、舞踏会の会場へ観客を誘っている。

授業では BBC のラジオ・ニュースのディクテーションとその日本語訳を毎週課題にしていた。学生には BBC とこの Paramount News との差を考えさせた。最も目立つ差は時制である。Paramount News から *ruling families*. までの 2 文は現在形、*After three days* 以降は過去形で、現在完了形が含まれていない。BBC のニュースでは、完了形がよく出てくるのだが、ここでは現在と過去を完全に別物としている。最初のセンテンスは、今観客に伝えるので現在形でよい。次のセンテンスは、ロンドンに行ったのは過去なのだから過去形にすべきだが、旅はまだ続いており、ロンドンに行ったこともその旅に含まれているということと、流される映像に臨場感を与えるために現在形が使われている。その後からは映像を過去のものとして認識し、伝えている。学生からの意見として、完了形が使われなかったのは、現在より少し過去にあったことを伝えるという映画ニュースの性質からではないかという意見が出た。また、ニュースの読み方が扇情的だという意見もあった。一方、映画の後半部分に流れるラジオ・ニュースでは、

This has given rise to rumours that her condition may be serious, which is

causing alarm and anxiety among the people in her country. (124)

とあった。このラジオ・ニュースはライブと思われ、今のニュースとおなじように、過去が現在にかかわってくる現在完了形と現在の状況をリアルに表す進行形が使われている。

3. 基礎文法指導の教材としてのスクリプト

この作品には、基礎文法を指導するための表現が豊富に出てきている。実際に映画の中で使われている英語に習った文法事項が出てくことは、学生にインパクトを与える。もちろん全てを網羅できるわけではないが、教師が補完することで基礎文法を学ぶことができる。それだけではなく、映画の会話の中で、習った文法がどのように崩れていくか、そしてそこにどのような意味があるのかを体感できるのである。

(1) 助動詞

会話が中心に進んでいく映画の中で、話者の心情を表すのに助動詞が強い影響を及ぼしている。特に法助動詞はまさにその "mood" を作り上げるのに一役を買っている。

・ can / could

Ann 王女は位が高いためか、Could よりも Can で依頼をする。仮定法で謙る必要がないからであろう。

ANN: Can I keep just one light on? (22)

[わがまを言った後、医者に懇願するとき。]

ANN: Can I sleep here? (38)

ANN: Can I have a silk nightgown with rosebuds on it? (38)

[注射で意識が朦朧としたまま、Joe の部屋で甘えるように。]

ANN: Can you lend me some money? (76)

ANN: Can you really spare all that? (76)

[最初に Joe と別れるとき、お金を借りる際に。]

(22) で、医者に懇願しているときは王女であるので謙る必要はない。しかし、Joe と会ったばかりのとき、自分の身分を隠さなければならないにもかかわらず、権威のある表現を使っている。ましてやお金を借りるときに Can を使うとは不遜ではないか。もちろん、映画の中ではそこが面白いのだが。同様に may を使い「許可」を表すことで、滑稽な雰囲気を出している。

ANN: You may sit down. (28)

[Ann 王女が注射された薬で錯乱しているときに Joe に対して]

ところが、後半になると、Ann 王女の口から Could を使った依頼文が発話されることになる。

ANN: Couldn't we go over tonight? (112)

[船上パーティーに Joe と Irving を誘うときに。]

修辞疑問文と言ってもよい否定疑問文であるが、Can を使って強引に行こうというつもりではなく、相手の気持ちを考えて尋ねている。これまでは Joe と Irving がローマの街を案内してくれたのだが、最後のイベントである船上パーティーだけは自分から意見を出したものであった。それまで「楽しませてもらっている」という気持ちがあり、勝手に決めてしまうことができなかったのである。話し方はかなり積極的に「行きたい」という気持ちが出ているが、Couldn't を選択したところに Ann の成長が見える。

平叙文内の could は、映画が会話中心のため、仮定法の場合が多い。

Man A: Couldn't be anything to do with the fact that you're ahead? (26)

[賭け事から抜けようとしている Irving に向かって。]

JOE: I er, couldn't agree with you more, (28)

[Ann の世界情勢に対する意見にあきれたように。]

HENNESSY: With pictures. JOE: Could be. How much? (56)

[Hennessy が写真付きの記事かという質問に対して Joe が曖昧に答えている。]

ANN: I wish I could. (82)

[Mario の船上パーティーの誘いに対して。]

ANN: I could do some of the things I've always wanted to. (88)

[丸一日遊ぼうという Joe の誘いに対して。]

ANN: I could earn my living at it. (126)

[料理などで生計を立てられるくらい上手いということ。]

以上の文に共通することは仮定法で断定を打ち消す could を使っているということである。作品中、過去形の could が会話の中に出てくことは一度もない。その頻度を体感することが学生にとって重要となる。could が出てくると全て「できた」と機械的に訳す学生が多いのだが、実際にはこんなにも仮定法の could が会話の中で使われているのだと認識できるのである。また、敬語がないと言われている英語だが、このように相手に対して気を使っている事実も伝えたい。

can は能力と可能性があるが、学生の中には可能性の can を理解できない者もいるので、その例を挙げる。

JOE: I overslept. It can happen to anybody! (50)

[Joe が寝坊した言い訳をして。]

AMBASSADOR: Twenty-four hours, they can't all be blank. (128)

[大使が、一日行方不明だった Ann 王女を責めて。]

この文を「できる」で訳して、それがいかにおかしいかを説明する。
cannot be の場合に「はずがない」と覚えている学生は多いが、平叙文で、be
動詞ではない例もあるのだということを認識させる。

・ have to / must

学校文法では have to と must の違いを説明する機会が少ないか、全く同一
のものとして教えることもともある。ここでは Ann の感情の追いかけなが
らその差が確実にあるということを確認する。両方とも「～しなければならない
ない」という義務の意味があるが、その思いの原因が主語の内にあるか外に
あるかで使い分けられている。must の場合は主語が自らそうしなければな
らないと思うのに対し、have to のときは原因が外にあって、そうしなければ
ならないと思うのである。

ANN: One thirty! I must get dressed and go! (68)

[Joe の家で目が覚め、時間を知ったとき。]

ANN: I must go. (72)

[Joe の家のベランダで Joe を待って、お別れをするとき。]

ANN: I will have to go now. (126)

ANN: I must go and get dressed. (126)

[船上パーティーから逃げてきて、Joe の家でお別れをするとき。]

ANN: I have to leave you now. (128)

[車の中で最後のお別れをするとき。]

(68) では、目が覚めて慌てて自分から戻ろうとしている。(72) の時点でも、少し落ち着いてはいるが、やはり自分から帰らなければならないという思いがある。しかし、Joe との素晴らしい一日を過ごした後は少し状況が変わる。(126) の上の文では *have to* を使い、戻らなければならない原因が、自分が王女であるという気持ちが表れている。自ら帰りたわけではなく、外に原因があるので「本当は行きたくないのだけれど」という思いが伝わる。愛の告白をほのめかした Joe に対して “No, please. Nothing” (止めて。何も言わないで。) と言った後に、Ann は振り切るかのように *have to* ではなく *must* を使って (126) の下の文を言う。自ら行かなくてはと思い込もうとするためであろう。そして車の中での別れの場面では、(128) で見られるように *have to* を使い、もうどうしようもないという諦めと、別れたくて別れるのではないという思いを表している。それゆえ、Joe も自分も振り切るために、この直後の台詞は厳しい、凜としたものになっている。

ANN: I'm going to that corner, there, and turn. You must stay in the car and drive away. Promise not to watch me go beyond the corner. Just drive away and leave me, as I leave you.

同じような差異が *will / shall* にあるが、作品中に平叙文で *shall* が使われる例は一つしかなかった。

HENNESSY: And the arrest of eight Secret Service men from a country which shall be nameless. (132)

[王女の記事などないと言い張る Joe に対して、編集長が証拠を羅列するとき。]

will が主語の意思であるのに対し、*shall* は主語以外の力を表す。ここでは

国の名前が何らかの力によって nameless になっていることを表す。今までさほど差がないと思われていた表現であっても、「言葉が違えば意味が違う」ことを伝える良い教材となる。

・ had better / should

この二つにも差がある。どちらとも元来は仮定法からきているが、had better の方が命令的で「どうしてしないのか」と責めている傾向にある。had better は、口語では had が省略されることもある。ここでは Joe の台詞の中からその差異を検討していく。

JOE: I think you better sit up. (28)

JOE: You know, people who can't handle liquor shouldn't drink it. (28)

[Ann 女王が外で寝ているところを Joe が見て。]

JOE: You'd better get to sleep. (40)

[Joe の家に来た Ann がまだ寝ぼけているようだったので。]

JOE: You'd better go in here and get it fixed up. (100)

[カフェで、Irving に水をかけたときに。]

JOE. You should always wear my clothes. (122)

[濡れたために Joe の服を借りて Ann が着たとき]

JOE: You better come in here and dry 'em off, Irving. (134)

[Hennessy をごまかすために Irving に再び水をかけたときに。]

(28) は二人の出会いのシーンだが、Joe は両方の文で Ann に命令できていない。上の例は I think を使って had better の命令を弱め、「起きた方がいいと思うよ。」と優しく言っている。下は people という一般論を出した上に should を使っている。一方、(40) で Ann が家に来たときには、Joe は多少怒っており、命令口調になっている。(100) では、Irving が王女に気付いて言っ

てしまうことを阻止するために、had better で強引に手洗い所に引き込んでいる。(122) では、Ann に対して言葉の裏で思いを告白しており、そう強くは言えないので should を使っている。(134) は (100) と同じ心境で命令している。このように、「すべきだ」という意味の強さを実際に使い分けていることがわかる。

・ gonna / going to

会話の中には、be going to の崩れた発音をそのまま記した gonna というものがある。この作品が作られた 50 年以上前にも、このような発音がされていたことを確認する。

HENNESSY: But, er, tell me, Mr. Bradley, if you are sober, just how are you going to obtain this fantastic interview? (58)

JOE: I'm gonna win that money and with it, I'm gonna buy me a one way ticket back to New York! (58)

[王女のインタビューを取るという Joe に対して Hennessy 編集長との言い合い。]

JOE: Today's gonna be a holiday. (88)

[Ann が「仕事は？」と心配するのに対して、Joe の答え。]

JOE: Your tin-types are gonna make this little epic twice as valuable. (102)

[Joe が Irving に写真をとらせようとして。]

IRVING: You gonna buy the crown jewels? (102)

[Joe が Irving に 3 万リラ貸してくれと言ったとき。]

(58) では、Hennessy が going to で尋ねたのに対し、Joe は gonna で答えている。年齢的な差であろうか。Irving の例はさらに崩れていて、be 動詞がない。意識としては助動詞的に使っていると思われる。この時代からすでにアメリカ

では, gonna は標準であったとみていい。be going to の意思未来はあらかじめ考えられていた意思を表し、(58)、(102) 下がその例に当たる。(88)、(102) 上は物主構文なので単純未来だが、現在の徴候などに基づく未来の予測を表している。

(2) 進行形

進行形は、動作の一時的状態を表す場合と近接未来を表す場合がある。ここでは近接未来の例を挙げていく。

CAB DRIVER: Where are we going? (30)

[タクシーに乗ったとき、運転手が尋ねた言葉。]

IRVING: I'm busy now and I'm meeting Francesca at Rocca's in a half an hour.

(70)

[Irving が Joe の誘いを断ろうとするとき。]

JOE: I'll go along with you, wherever you are going. (74)

[Ann と最初に別れるときに Joe が言った。]

IRVING: What are you tryin' to do to me? (100)

[Irving がトイレに連れていかれて、Joe に言った。]

IRVING: I'm going straight from now on. (108)

[警察に捕まったあと、Irving が言った。]

ANN: I'm going to that corner, there, and turn. (128)

[Joe との最後の別れのときに、Ann が車中で言った。]

HENNESSY: She's holding the press interview today. (136)

[記事がないと思った編集長が Joe に言った。]

進行形が近接未来を表す場合は、その動詞が基本的に往来発着を意味するときで、未来の意味の副詞を含む場合が多い。実際に副詞が含まれているの

は (70)、(108)、(136) だが、それ以外は go なのであえて必要ないのであろう。助動詞のところで説明した be going to よりもさらに近い未来の意識がある。

(3) その他の文法的特長

授業で使える文法を以下に挙げる。できるだけこの映画だけで説明できるものを探した。

・ 修辞疑問文

形は疑問文だが、反語的に話者の考えを納得させようとするときに使う形で、談話上の表現である。ニュース英語や新聞英語など、一方的な発話では存在しない。wh- 疑問文が多く、意味的には irony を含む場合や依頼や提案もある。Why の場合は否定疑問文の形を取る場合が多い。

HENNESSY: What do you care? (56)

[記事の値段を尋ねてくる Joe に対して。]

JOE: Irving! Why won't you answer the phone? (70)

[なかなか電話に出ない Irving に対しライラして。]

MARIO DELANI: Now, why you not come dancing tonight with me? (82)

[床屋が Ann 王女をダンスに誘おうとして依頼。]

JOE: Why don't we do all those things...together? (88)

[やりたいことを話した Ann 王女に Joe が提案。]

IRVING: Aren't you gonna introduce me? (94)

[Joe といる Ann 王女を見て依頼。]

IRVING: Hey, why not? (112)

[船上パーティーに行かないかという Ann の言葉に同意して。]

JOE: Who's holding out on you? (130)

[Hennessy が記事を隠しているだろうと問い詰めたのに対して。]

(112)のように常套句になったものもある。修辞疑問文か普通の疑問文かは、文脈上「答えを要求しているか」という点にあるので、構造上判断することはできない。だからこそ映画一本全て学習することに意義が出てくる。登場人物の苛立ちや驚きなどの感情がこの修辞疑問文の中に見ることができる。

・ some / any

平叙文のときは some、否定・疑問文のときは any と習ってきた学生概念を一度壊すことになるので慎重に説明しなくてはいけない。

JOE: You got any money? (28)

[Joe が Ann と会ったときにお金を持っているか尋ねて。]

JOE: Yes, a gun, a knife, anything! (54)

[Giovanni に部屋の中にいる Ann を守るように言ったとき。]

ANN: Shall I cook something? (122)

[船上パーティーの後、Joe の部屋で。]

(28) は平叙文の形をしているが、文末が上がっているので疑問文として捕らえ any。(54) は「何でも」の意で anything。(122) は Ann が料理をする気があり、作るか作らないか尋ねているわけではないので、肯定文の something が使われている。こういった英語のフレキシブルな部分は文法の信頼を失くす可能性がある。まず始めに some と any の違いをきちんと説明し、そこからある意図を持ってずれていることもあるということを説明すべきであろう。

・ 完了形

劇中に完了形は多くあるので、どれを使っても良いが、完了形概念がわからない学生や、過去形との違いを説明し易い用例を使いたい。なお、完了

受動態や完了進行形はあるが、過去完了形はなかった。

ANN: Have... have I had an accident? (66)

ANN: Have I been here all night...alone? (66)

ANN: So I've spent the night here with you? (66)

[Ann 王女が気が付き、Joe に自分の現状を尋ねている。]

いずれも Ann 女王がベッドの中で発した言葉だが、過去形を使わずに現在完了形を使っている。事故が起きたのも、一晩中ここに一人で居たのも、Joe と一緒に夜を過ごしたのも、全て過去のことではあるが、その事実を引っ張ってきて、現在ここにいるという完了時制独特の時間概念を伝えなければならない。日本語では表しにくい概念なので、時間軸を記して説明するのがいいだろう。

4. 特徴的な表現

映画の中には、会話として、時代として、この場所として、この映画としての特徴が見られる。普段使わない表現や、非文法的表現が含まれることもある。学生のために作られたテキストではなく、英語の母語話者が普通に見る映画だからこそ学べることもあるのではないか。

JOE: Oh, well I got three shy little sevens. (24)

IRVING: Er, a nervous straight. (24)

IRVING: Come home. (26)

IRVING: That's ten bucks. (26)

[賭博上にて。]

(24) では、Joe の「シャイな7のスリーカード」に対し、Irving の「神経

質なストレート」。これは transferred epithet (転移修飾語または間接限定) という、本来なら修飾すべきでない語を修飾するというレトリックである。人の心情を物に投影するという言葉遊びを二人の掛け合いでうまく使っている。(26) は賭け事でよく使われる「来いよお～」という良い手を待つ表現。ten bucks の buck は、ドルを表す。インディアンや開拓者たちが商人との取引でシカ皮を交換の単位としたことからではないかとされている。その他に、Joe が Hennessy と記事に関して賭けをする場面で five grand という表現が出てくる。grand は、G や gee とも書き、米国では 1000 ドル、英国では 1000 ポンドを表す。Joe はアメリカ人なので、ここでは 5000 ドルとなる。

JOE: She tell you where she want to go. (34)

JOE: Holy smoke. (42)

JOE: In toto? HENNESSY: Yes, Mr. Bradley, in toto. (50)

JOE: Am I fired? (52)

ANN: I'm sorry, I haven't time. (72)

ANN: Higher. (78)

IRVING: I'm the same racket as Joe... (96)

その他、気になった表現を列挙した。(34) では tell と三単現の s が付いていない。(42) は驚きの言葉。(50) の toto はイタリア語の「全部」から。(52) の fire は「クビにする」。(72) では Ann 王女の言葉に have 動詞が見られる。(78) は床屋で髪を切るときに “Shorter” と言わず、鏡に映った姿をみて “Higher” と言っている。(96) の racket は「大騒ぎ」の意から「怪しい仕事」。

5. 授業で映画を使う意義

英語力を伸ばす方法として留学は一つ的手段ではあるが、全ての学生が留学できるわけではない。日本にいて、講師が大学 1 年の学生にしてあげられ

ること。それは、基本的な英語力を上げることであるが、加えて「英語を学ぶモチベーション」を与えてあげることではないだろうか。文法を学び、リスニング能力を上げて、それを実際に使う場がないと、学生の中に「英語なんかやっても無駄だ」という失望感が生まれる。それを払拭するためにも、実際にネイティブ・スピーカーが会話し、コミュニケーションを英語でとっている姿を見せる必要がある。作られた教材用の音声ではなく、本物の会話を体感させる。その素材として、今回は映画を選択した。授業時間から考えて、TVドラマなどもあたってみた。確かに、その時代、その土地の雰囲気そのままで感じることができるので、教材としては悪くはないのだが、偏りが大きい。若者独特のスラングが多く含まれていたり、文法的に外れ過ぎていたり、普遍性に欠ける。その点、映画は全世界で発表されるので、どの国でも共感できることを前提としているため理解しやすい。特に古い映画は英語もわかりやすく、暴力や性描写など、学生に見せては問題となるシーンもほとんどないので使いやすい。この *Roman Holiday* は、現在では観たことのある学生が少ないため、展開を楽しめ、どんどん作品に入っていく。そしてその映画の中で、自分が学んだ文法や表現、音声などがどのように使われているかを体験できれば、英語に対するモチベーションも上がるのではないだろうか。

References

- 村川義郎、『「ローマの休日」で学ぶ英会話』、南雲堂、2005
杉原葉子、『名作映画でペラペラ英会話7 ローマの休日』、コスミック出版、2005
(注：引用の後ろの括弧内の数字はこの本のページ数。)